

ヒバクシャ医療の「今」を発信する

な し む し む

NASHIM

ヒバクシャ医療国際協力通信

SPRING

2001



発行○平成13年3月1日
長崎・ヒバクシャ医療国際協力会
〒850-8570 長崎市江戸町2-13
(長崎県原爆被爆者対策課内)
Tel. 095-823-4278
Fax. 095-820-3037

招聘事業

NASHIM's Works

平成12年度専門家派遣事業

警鐘「残された負の遺産」

チェルノブイリ原発の完全停止 2000年12月15日

Doctor's Works

在南米被爆者対策 在南米被爆者巡回医師団 派遣事業 日赤長崎原爆病院 副院長 松尾 隼

AWARD

保健文化賞受賞!

Letter Box

「NASHIMは20世紀最大の負の遺産と研究成果を国境を越えて
全人類の幸せに貢献活動する世界でも希有な組織」

News

外務省補助事業 ヨード不足の地域に測定器を供与

REPORT

WHO本部専門家の特別講演

第52回 保



NASHIM 招聘事業

NASHIMでは、毎夏チェルノブイリ及び
セミパラチンスクといった旧ソ連を中心とした
放射線被ばく地域や韓国から、実際にヒバクシャ
医療に従事している医師や専門家を長崎へ招聘し、
研修の機会を与えています。

この事業は長崎原爆被災後、長年蓄積されてきた被爆者医療のノウハウや、放射線医学研究の知識や実務を研修してもらうためのものです。これまで招聘してきた医師・専門家の国別内訳は別表に示していますが、旧ソ連邦を中心とした多くの医師が、毎年夏の暑いさなか、長崎大学医学部や同附属病院、あるいは日赤長崎原爆病院などで1ヶ月以上研修を受けています。この間多くの市民や関係機関にお世話になっていきますので、まさに長崎ならではの官公民プロジェクトとなっています。

これまで研修した医師の多くが、帰国後その知識や技術を実際のヒバクシャ医療現場に役立てています。日

■医師等の受入・派遣の国別状況等

区分/年度	5	6	7	8	9	10	11	12	計
医師等受入研修	40	43	32	24	18	15	18	18	208
独自事業	5	5	6	7	5	6	7	9	50
関連									
チェルノブイリ	1	1	1	1	1	1	2	1	9
ベラルーシ共和国	2	2	2	2	1	1	1	2	13
ウクライナ	2	2	2	2	1	1		1	11
小計	(5)	(5)	(5)	(5)	(3)	(3)	(3)	(4)	(33)
カザフスタン共和国				1	1	1	1	1	5
アメリカ合衆国							1		1
韓国			1	1	1	2	2	2	11
共同事業			1	1	3	2	3	3	13
放射線影響研究所			1						1
ベラルーシ友好協会				1	3	2	3	3	12
調整事業	35	38	25	16	9	6	7	5	141
笹川財団	10	9		11	3	3	3	1	40
外務省	21	17	17		1		2		58
日本赤十字社	3	3	8	3	3	3			23
WHO共同研究	1	6							7
HICARE・広島大		3		2	2		1		8
放射線影響研究所							1		1
JICA・セミパラ								4	4
外務省補助事業					1	1	1	1	4
医師等派遣			1	5	3	7	4	8	28
ベラルーシ共和国					1				1
ウクライナ			1	5					6
カザフスタン共和国					1	2	2	2	7
韓国							3	4	7
外務省補助事業					1	2	2	2	7

本人専門家によるフォローアップ調査により、その成果や問題点については適切な評価が行われています。

さらにNASHIMは、韓国人医師・専門家の研修も同様に行ってきました。これは、長崎・広島で被爆し、その後祖



国に帰国された韓国人被爆者に対する医療レベルの向上を目的としています。主にソウル赤十字病院の医師・看護師が来日し、長崎で研修を行っています。また、最近では被爆者のために設置されたハプチョンの福祉施設からの医師・看護師も受け入れ、より現場に密着した医療支援を行っています。この韓国人医師・専門家研修事業についても、長崎の専門家が派遣され定期的にフォローアップ調査を行っています。

今後もNASHIMは、長崎原爆を原点到海外ヒバクシャに還元できる医師・専門家の養成・レベルアップを目的として、この事業を行っていく予定です。



NASHIM's Works

平成12年度専門家派遣事業

昨年8月下旬から9月上旬にかけて、NASHIM専門家派遣事業の枠内で、医療の専門家として齋藤寛長崎大学医学部長、行政の専門家として松本清助長崎県原爆対策課長の2名をカザフスタン共和国のセミパラチンスクへ2週間派遣しました。

1999年9月のセミパラチンスク支援東京国際会議を受けて、長崎大学医学部の山下俊一教授がJICAの専門家として3ヶ月現地に滞在している最中であり、齋藤医学部長らは訪問期間中に、山下俊一教授らが中心となって進めているJICAの医療改善計画プロジェクトの視察、協力も行いました。また一行は、長崎大学と姉妹校の関係にある、セミパラチンスク医科大学を訪問し交流を深めました。第2回セミパラチンスク長崎医学賞の授与式の後、医学生を前にした会場では齋藤医学部長が、NASHIM関係者では4人目となる、セミパラチンスク医学アカデミーの名誉博士号を受賞されました。

一方同時期に、医学部の朝長万左男教授、近藤宇史教授等が、在韓被爆者の医療支援を目的として韓国を訪問しました。朝長教授らは、現地の赤十字病院を訪問して、これまで長崎で研修を行った医師たちのフォローアップ調査を行うと同時に、原爆被爆者が数多く暮らしているハプチョンの福祉施設を訪問し、入所者や施設従事者の悩みや要望を聞きました。

いずれの派遣事業も、これまでの招聘事業のフォローアップと同時に、今後の活動の方向性を検証する大切な事業となっています。





チエルノブイリ原発の完全停止

2000年12月15日

1986年4月26日未明、旧ソ連邦ウクライナ共和国の穀倉地帯、キエフ州チェルノブイリという小さな町で、世界を震撼させる人類史上最悪の原発事故が起きました。事故から15年を迎えようとしています。20世紀最後の冬に、チェルノブイリ原子力発電所の火が消えました。多くの人は今まで稼動していたことに少なからず驚き、同時に酷寒の冬を電力事情の悪いウクライナが、いかに生命線を確保するのかと大変心配しています。

広島、長崎の原子爆弾被災と異なり、チェルノブイリでは多くの周辺住民は放射性降下物の影響を受け、今なお放射能で汚染された大地に住み、汚染した食べ物や水を口にしています。事故直後の混乱や、詳細な正しい情報の欠如に加え、適切な対応が困難な状況から、その後子供達の甲状腺がんの激増という、これまた未曾有の惨事を引き起こしました。世界のマスコミは、こぞってチェルノブイリの悲劇を取り上げ、チェルノブイリの子供たちを衆目の的にしています。当時の東西冷戦構造の中では、核に関する機密事項があまりにも膨大であり、周辺住民に対する健康への配慮や補償問題はなおざりにされています。ゴルバチョフ書記長(当時)が推進していたペレストロイカ(経済改革)に加え、グラスノチ(情報公開)への路線転換への追い風となったこの原発事故は、20世紀最大の懸案事項だった「核開発競争の狂気」に少なからず歯止めをかけ、その後の東西対立の雪解けをもたらしました。しかし、放射能汚染の後遺症で苦しむ多くの海



外ヒバクシャの存在もまた明らかにしてきました。例えば、原発事故処理に動員された多くの軍人の中には、核戦争を想定して訓練されたカザフスタン共和国セミパラチンスク核実験場から派遣された若者も含まれているのです。このような複雑な世界情勢の中であり、原爆被爆者の思いを世界に伝え、医療に特化した国際協力の推進役を担うべく発足したのがNASHIMです。長崎大学医学部の専門家を中核に、長崎県、長崎市が関連機関と共同で、足並みを揃えてヒバクシャ医療を実践するというまさに手作り、独創的な長崎からの官公民一体となった国際貢献を目指しています。21世紀を向かえ、歴史に名を刻む「広島・長崎原爆」と「チェルノブイリ原発事故」は、「人間の弱さと愚かさ」を象徴する科学万能・安全神話に対する人類への警鐘でもあります。これら「負の遺産」を清算するのではなく、原爆被爆の原点に立ち返り、永井隆博士の精神に基づく「反核平和・国際協力」という実行力を継承することがNASHIMの存在として今後も大切であると言えます。

Doctor's Works

在南米被爆者の診療を実施

在南米被爆者巡回医師団派遣事業

日赤長崎原爆病院副院長 松尾 隼

この事業は、南米に移住されている被爆者対策として、外務省、厚生省、長崎県、広島県の四者共同で行っているもので、南米5カ国(ブラジル、パラグアイ、ボリビア、アルゼンチン、ペルー)に2年に1度医師団を派遣し、現地で被爆者の健康診断、相談を実施しています。平成12年度も、長崎、広島、厚生省から3名の医師と広島から2名の事務官という構成で、10月26日から11月9日までの日程で行われました。

現在登録されている被爆者は180名で、その内80名が受診されました。ただ、広大な土地がらで交通の便や治安が悪く、高齢である事により一人で外出が出来ないこと、情報システムの遅れで音信がとれない事により受

診出来ない方々の健康状態が気がかりでした。事業内容は、前もって現地医療機関において検査されたデータを基にしたの診療、また、被爆者行政についても相談を行いました。疾病については生活習慣病が主でしたが、平均年齢が69才という高齢化のため老後の心配、被爆者であるがゆえの後遺症への不安が強く、帰国しての治療を希望されていました。行政相談では、現地の経済事情や医療体制の違いがあるため、在外被爆者へも援護法の適用を求める声が多くあり、切実な感がありました。今回の事業を通して思った事は、南米に移住され、これまで懸命に努力して生きてこられたみなさんの日本人としての誇りと自信、またその中で献身的に被爆者のために活動されている多くの人々を目の当たりに見ることが出来、非常な感動を覚えた事です。

最後に、心あたたまる歓迎とご協力をいただいた県人会や被爆者協会の皆様、在外公館に対して心から御礼申し上げます。



AWARD

NASHIMが保健文化賞受賞!

昨年8月に、長崎・ヒバクシャ医療国際協力が第52回保健文化賞を受賞しました。

この賞は、保健衛生の向上に寄与した団体または個人に対して送られる大変名誉な賞であり、受賞者は昭和24年の第一回からこれまで764件にのぼっています。本年度は75件の応募の中から団体10件、個人4名が受賞しました。

10月には、井石会長、池田副会長、松本事務局長が上京、ホテルオークラにて厚生大臣よりの表彰状と主催者の第一生命保険相互会社よりの感謝状をいただき、さらに、井石会長は、皇居にて天皇皇后両陛下へ

の拝謁の栄誉も賜りました。

帰国後11月には受賞記念祝賀会を催し、関係機関の皆様と受賞を喜び合いました。

この受賞は、長崎大学医学部を中心としたヒバクシャ医療に携わっておられる関係機関の、長年にわたる地道なかつ献身的な活動を評価いただいたものであり、大変喜ばしいことですが、同時に、NASHIMへの期待と社会的影響、事業推進の責任も大きくなってきます。今後とも被爆者医療のノウハウを世界の被ばく者救済の為に活用することを目的に、より、時代にあった国際貢献に寄与する事業の推進を目指していきたいと思ひます。



Letter Box

NASHIMへのおたよりコーナー

長崎から、全国から、そして世界から、毎回たくさんの方々にご参加いただいている公開セミナーや研修会。このおたよりコーナーでは、そんなみなさんからNASHIMへお寄せいただいた温かい激励やメッセージをご紹介します。



NASHIMは20世紀最大の負の遺産と研究成果を国境を越えて全人類の幸せに貢献活動する世界でも希有な組織

長崎～ロシア/ベラルーシ/ウクライナ
友好市民協会

代表 松藤龍彦さん

平凡無知な一長崎市民が心ならずもチェルノブイリに関わり、気付いた時には人生で最大の感動と感銘、知識を与えられて満10年が経過した。最初チェルノブイリの現地で見えたもの全てが私の想像を越えていた。咲きほこるリンゴの花、無限に咲く菜の花やタンポポの草原、ヒバリがさえずりコウノトリが舞い、原発の対岸プリピヤテ川の岸边にはスズランの花が群生し、人類史上最大の事故が信じられない幾年かが過ぎた。一方、医療現場では薬品棚に薬は皆無、薬も注射器も自分で買い求めるのが常識と知ってカルチャーショックで幾度も倒れた。各国の支援団体活動の実態と素顔を見て、支援のあり方、維持管理の困難性、自立への方策等多くの教訓を学んだ10年でした。

山下俊一教授の言葉、「長崎、チェルノブイリ、セミパラチンスクの尊い犠牲者が残してくれた生命のデータを私物化することなく人類共有の財産として調査、研究に生かし、成果を全人類へ還元する。」その心を支えているのがNASHIMだと思います。日本の最西端の地方都市が、世界の人々から頼られ、世界に誇れる希有な存在と感じています。

医学教科書Thyroid: Fundamental AspectはNASHIMの心と成果が玉成されたシンボルだと思います。NASHIMが招聘した研修医達が、休日もなく毎夜徹夜に近い献身的なラポーター(働き)で完成されたことも、現場で手伝って知っています。市民の私には衝撃的な感動でした。

NASHIMにより公刊されたイリーンさんの「チェルノブイリ-虚偽と真実」は、実験できない巨大事故の素顔の一面を伝えた貴重な証言です。私にはチェルノブイリについて一言では何も言えなくなりました。

「放射能Q&A」も理解に大変役立ちました。世界と市民のNASHIMとして益々御発展されることを切望し、お便りいたします。



WHO本部専門家の特別講演

去る平成12年12月18日、長崎大学医学部附属病院においてWHO(世界保健機関)本部(スイス・ジュネーブ)のシュケビッチ専門官による特別講演が行われました。一昨年の東海村事故以来関心が高まっている、緊急被曝時医療の際の国際医療ネットワークシステムに関する話が行われ、国際機関が緊急被曝事故の際に、どのような活動を行っているかについての具体的な説明がありました。現在、WHOを中心としてREMPANという国際的なネットワークが構築されていますが、これは不測の事故に備えて、緊急時にどのような医療を行えばよいのかについて、世界中の専門家の意見を反映するシステムです。講演では、このREMPANの活動状況についての説明が行われました。NASHIMの活動にも合致し、今後の国際機関との連携が模索されています。またこの日の講演は、大学間での衛星通信を用いて全国の大学病院に生中継され、大きな関心が寄せられました。



Information

第4回「永井隆」平和記念・長崎賞の募集がもうすぐ始まります。

編集後記

20世紀から21世紀へのバトンタッチがなされました。新しい世紀は、いわば情報の世紀でもあり、益々地球が小さくなります。NASHIMにも、「長崎から世界へのヒバクシャ医療情報・人材発信基地」という大きな役割が期待されています。長崎被爆という悲しい体験を原点に、21世紀も国際社会での共存共栄を目指し、正しい情報収集と発信、適切な人材育成をNASHIMの原点としたいと思います。

News

外務省補助事業

ヨード不足の地域に測定器を供与

毎年支援を受けている外務省からの補助事業では、今年はロシア連邦へ尿中のヨードを測定するための機材供与が行われました。甲状腺から分泌されるホルモンはヨードから合成されますが、世界の多くの地域では、食習慣の違いや地域土壌問題等からヨードが欠乏しています(ヨードは、昆布のような海産物に豊富に含まれますので、そのような食事をとる習慣のない地域では、ヨード不足が問題となります)。ヨード欠乏は、チェルノブイリの事故のように放射性のヨードが大気中に放出された際、大きな問題を引き起こします。つまり、ヨードを豊富に摂取している地域では、放射性ヨードを被ばくしても甲状腺にそれが蓄積することは少ないのですが、ヨード不足の地域では、この放射性ヨードが甲状腺に多く蓄積してしまいます。チェルノブイリ事故後に小児甲状腺がんが増えたのは、この放射性ヨードが原因ではないかと考えられています。このため、特にヨード欠乏地域に住む人々のヨ-

ド(主に尿を用いて測定します)の量を正しく測定することは、ヨード不足の解消予防以外にも放射線被ばく防護という観点からも非常に重要です。

今回NASHIMでは、最近開発された簡便なヨード測定機材を、実際にチェルノブイリ周辺住民の尿中ヨードの測定にあたっているモスクワ内分泌学研究所に供与しました。昨年12月には、専門家2名を現地へ派遣して、その測定法についてのトレーニングを行いました。さらに、モスクワ内分泌学研究所から研修生を一名招聘し、機材の取り扱いの習熟を目的とした研修を行いました。

これによって、これまで時間がかかり煩雑であり、有毒な試薬を用いなくてはならなかったヨード測定が、簡便に、しかも安全に行えるようになりました。今後はより多くの住民のヨード測定が行われ、ヨード不足の予防や被ばく防護に役立つことが期待されています。

